

十九世紀中頃の聖心学院の教育についての一史料

——学院図書室蔵書のための選定図書目録について——（その二）

井上 堯裕

**A Document on the Education of the Society  
of the Sacred Heart in mid-19th Century France  
—A Select List of Books for Libraries of  
Boarding Schools—**

In the archives of the Mother House of the Society of the Sacred Heart of Jesus in Roma Villa Lante is found a catalogue entitled *Petit catalogue de livres qui peuvent composer la Bibliothèque du pensionnat*. This catalogue, supposedly composed in 1842-3, is interesting as it contains materials which show the actual aspect of education as it was carried out at Sacred Heart schools in France at that period.

The author of this article first introduces a survey of the catalogue and reports on the result obtained from a comparison of each one of 600 items of the enlisted books therein to catalogues of the *Bibliothèque Nationale* in Paris. Likewise, having examined the publishing date of the oldest and the latest printing of these 600 books respectively, the author points out that publication of a good number of the books (especially religious works and biographies) was dated way back in the pre-Revolutionary period, and yet most of them were doomed to disappear within the next 20-40 years. In other words, as far as one can infer from the catalogue, the culture that the society had tried to convey to students through education was something which was deeply rooted in the past, even though fated to live only a short into the future.

ローマのヤニグロの丘のふもと、ヴィラ・ランテにある聖心会本部文書室に、Petit catalogue de livres qui peuvent composer la Bibliothèque du pensionnat à l'usage des Maîtresses et des élèves avec des notes explicatives AMSSCG と題された寄宿学校図書室の蔵書のための選定図書目録がある。後に述べるように、この目録（以下『カタログ』と記す）は、一八四二・三年頃に作成されたものと推定されるのだが、当時の聖心会の教育の実際について、その一端を具体的に伝えるものとして興味深い。本稿は、この『カタログ』の概要を紹介し、現在まで進めてきた検討作業の仮の結果を報告する研究ノートである。

久しい以前から、私はフランス革命後のフランスの支配階級（あるいは、むしろ、最近のフランスの社会史研究者たちの好んで用いる用語を使えば、指導階級 [classes dirigeantes]）の社会意識の持続と変化の有り様に関心をもっていたのだが、ここ暫く、そうした関心から、聖心会創立から一九世紀半ばにかけての会の教育にも興味を抱いていた。しかし、日常の仕事に追われるままに手を着けることもできないでいたのだが、一昨年（一九七七年）春から、在外研究の機会を与えられたので、当時のフランスに会が設立していた学校のいくつかをとり上げ、それが所在する都市の社会的枠組の中で、その活動を研究してみようと考えた。実際には、さしあたり十分な史料が見つからず、そうした本格的な社会史的研究はあきらめざるをえなかったのだが、その史料調査の途中で見つかったのが、この『カタログ』である。

この時期の聖心会の歴史については、創立者、聖マгдаレナ・ソフィアの伝記的研究があり、<sup>1)</sup> 会憲や会全体の活動についての研究があり、また、教育の分野についても、一八〇六年以来、数度にわたり作成、改訂された『学習計画』(Plan d'études) を主な史料として、聖心会の教育の理念と内容を検討した研究が、すでに存在する。しかし、会の教育活動のより具体的な実際を示し、その機能を当時の社会的な変化の枠組の中で検討した研究は、少くとも

まとまったものとしては存在しないようである。そして、そうした観点から見ると、『学習計画』が聖心会の教育の理念、基本原則を示すものとなれば、ここに紹介する『カタログ』は、そのより具体的な適用として興味深い。そこで、長期的には、先に述べたような個別の学校を対象とした社会史的研究を可能にするような史料が、いつの日にか見つかることを期待しながら、当面はこの『カタログ』の分析を手始めに、『学習計画』や『寄宿学校生活規則』(Règlement du Pensionnat)を私なりの視角で検討しなおしてみたいと考えているのである。

しばらく前まで、カトリシズムの世界、とくにその近代以後は、私にとって、全く未知の領域であった。ところが、本学に職を与えられたことを機会に、先に述べたような関心に惹かれるままに、このなじみのない分野の研究に着手するようになった。いまだにもっとも基礎的な知識や経験を欠き、おそらくは誤解や短見も多いと思う。聖心会会員のシスター方をはじめ皆さんの御批判と御助言を心から仰ぎたい。

## (一)

『カタログ』の概要 『カタログ』は手書きの簡易印刷で、記載されている本は約六〇〇点、『教義・道徳』に始まり『学習書』に終る計一一項目に分類、配列され、それぞれについて、著者、表題、巻数、版数が記され、一部には、対象学年、用途、削除箇所などの留意事項が付記されている。

## 例

Lebrun Explication des prières de la messes 1 v. in 8°. 1<sup>er</sup> cours d'ouv et 2d.

J. Conny Révolution française 13 v. in 18 quelques pass: à cartoner pour de grandes élèves.

表 1. 分類項目と各項毎の点数

教義・道徳	(Dogmes et morale)	49	(38)
黙想	(Méditations)	12	(10)
修徳	(Ascétiques)	80	(61)
静修	(Retraites)	6	(4)
祈禱	(Livres de prières)	11	(7)
伝記	(Vie)	79	(62)
歴史	(Histoire)	49	(45)
書簡	(Lettres)	13	(2)
雑	(Mélanges)	218	(156)
文学・詩	(Littérature et poésie)	17	(13)
学習書	(Livres d'étude)	60	(50)
計	(total)	594	(448)

(括弧内は、国立図書館のカタログと照合できたものの点数。全体で8点が重複して記載されていた。重複分は除き、二つの分類項目にわたって重複している場合は、初出の項目に数えた。)

〔ルブラン ミサの祈りの解説 一巻 八折版 第一・第二級の作業時間用〕

J・コニー フランス革命 一三巻 一八折版 若干の節を削除、年長の生徒用〕

分類項目と各項目毎の点数は上の表の通りである。

国立図書館蔵書目録との照合 筆写しパリに持ち帰った『カタログ』にしたがって、パリの国立図書館で、まず手始めに身近な興味から、歴史の項の四九点について、現物を見てみようと思った。ところが実際に図書館の蔵書目録を検索してみると、著者名が省略されていたり、姓と名とがとり違えられていたり、綴り字が違っていたり、あるいは書名の一部が省略されていたり、単純な誤記(そして私の誤読?)も加わって、図書館の蔵書目録に記載のものとの照合し、正確な著者名、書名をつきとめるのが一仕事であることがわかった。そこで、まず『カタログ』全体について、この照合の作業を片付けてしまうことにした。この作業がひどく厄介な今一つの理由は、この図書館を利用した人なら誰でも知っている、蔵書目録の奇怪なまでの複雑さがある。だが、ともあれ、結果として、歴史の項

目の四九点については、まだ時間の余裕もある頃だったので、さまざまに工夫をめぐらして、四五点までを見つけ出すことができたのだが、全体としては四分の三が照合できるとどまった。ただし、残りの約一五〇点について、照合できなかった理由は必ずしも『カタログ』の側の不備にのみあるわけではない。国立図書館の側にも、蔵書目録の複雑さに加え、一六世紀にさかのぼる伝統をもつ法定納本制があるにもかかわらず、この時期のものでさえ、出版された本すべてがそろっているとは到底言えない現状があるからである。

『カタログ』作成の時期 国立図書館の目録との照合の作業によってこれらの本の出版年を知ることができ、それから、この『カタログ』の作成されたおおよその時期を推定することができた。つまり、これらの本すべてについて、国立図書館に記載されているもっとも古い版（初版が記載されていない場合もかなり多いので、初版とは限らない）の出版年を調べてみると、一八四〇年発行のもの一七点、一八四一年が一九点に対し、一八四二年は九点、一八四三年は二点と激減しており、それ以後の年のものも八点ほどあるが、二点を除き、何れも再版であることが明記されているのである。したがって国立図書館の蔵書目録の不完全さを考慮に入れると、『カタログ』は、一八四二年かおそくとも一八四三年に作成されたものと思われる。

オジエのカタログとの関係 ところで、この『カタログ』と部分的に酷似したもう一つの推選図書目録がある。それは同じ本部文書室所蔵の L. Ogier, *Petit catalogue de bons livres pour les élèves qui rentrent dans le monde* (『社会に戻る生徒のための良書小目録』)である。これは、同じ著者の小冊子 *Règlement pour une jeune personne élevée au Sacré Cœur et qui rentre dans le monde, Le Mans, 1830* (『聖心学院で養育された社会に戻る若い女性のための生活規律』)と、

一八三〇年刊)の付録であり、その末尾に刊行が予告されているが、われわれの『カタログ』に記載されている一八四〇年から一八四三年にかけて刊行された本が、ほとんどそのまま記載されていることから、実際に刊行されたのは、小冊子自体からはるかに遅れ、同じく一八四二年頃と考えられる。また、本体の小冊子が活字印刷であるのに対し、この付録の目録は、われわれの『カタログ』と同じく、手書き簡易印刷である。著者オジエについては、小冊子にル・マンの聖心学院の学院付き司祭(aumonier)とある以外に、さしあたり、分からない。国立図書館の著者名目録には、この小冊子のみが記されている。

オジエのカタログとわれわれの『カタログ』とは、分類の仕方が大綱で一致しているし、各項目内部での本の配列順序も部分的に類似しており、そっくり何れかが他方を引き写したと見られる部分も少なくない。また、著者名、書名の省略の仕方や誤記にも共通性があり、どちらかが他方を「タネ本」として作られたものであることは間違いない。しかし、両者には、かなり目立った相違もある。

オジエのカタログとわれわれの『カタログ』に共通してあげられている本は全体で三四九点、オジエのカタログ記載の総点数は四四〇点であるから、その八割弱に当たり、われわれの『カタログ』の総点数五九四に対してはその六割弱にあたる。ところが、この割合は分野によってかなり異なり、宗教書とくに『教義・道徳』の項では共通するものの割合が小さく、歴史や伝記、とくに『雑』の項では共通するものの割合が大きい。分類項目のたてかたが多少異なり、同じ本が別の項に分類されていたりするので、簡単な比較は困難だが、一応、表にまとめれば、次ページの通りである。

オジエのカタログには『悪書』の項があって、われわれの『カタログ』にあげられているマルモンテルの『インカ』やシャトブリアンの『キリスト教精髄』が悪書扱いされていること(3)から端的に分るように、オジエは啓蒙思想

表 2. オジエのカタログとの比較

	全 体	宗教書 全 体	教義・道徳	歴史・伝記	雑	
オジエのカタログに 記載の点数	440	141	55	109	179	
共通するものの点数 とそれが占める割合	349 (79%)	80 (57%)	27 (49%)	86 (79%)	163 (91%)	
われわれの『カタ ログ』に記載の点数	594	158	49	49	79	218
共通するものの点数 とそれが占める割合	349 (59%)	75 (47%)	22 (45%)	31 (63%)	57 (72%)	158 (72%)

やロマン主義の傾向に対し、よりきびしい態度を示している。しかし、オジエと『カタログ』の編集者の間の見解の違いは、とりわけ、宗教の領域で大きかったと考えられるわけで、学院付き司祭との間にさえ、かなり大きな宗教上の意見の違いがあったと推測されることは、当時の宗教界の状況と聖心会の立場を理解する上で興味ある事実ではないかと思う。

これらの二つのカタログの何れが先に作られたのかは、結局、今のところ、確たる判断はつかない。最初は、オジエのカタログをもとに、われわれの『カタログ』が作られたという印象をもったのだが、仔細に検討してみると、むしろその逆とも考えられそうである。

各項目毎の内容 各項目毎にそのおおよその内容を、一、三の実例をあげながら、見ておこうと思う。

(1) 教義および倫理 (四九点)

まず、仏語訳聖書、聖書事典、聖書物語など。ついでアンペール『宗教のことも重要な真理とキリスト教の主要な義務についての意見』<sup>(4)</sup>などのような教義の解説書や公教要理の解説がある。護教論に関しては、ヴォルテール批判として出版以来有名であったゲネ『ポルトガルとドイツのユダヤ人のド・ヴォルテール氏への手紙』<sup>(5)</sup>や、王制復古期に公教育教員団総裁(文部大臣)や宗教問



題担当大臣として活躍したフレンヌスの『キリスト教弁護論』<sup>(6)</sup>などがあり、また、イギリス国教会批判の書として有名なウィリアム・コベットの『イギリスとアイルランドにおける宗教改革史についての手紙』<sup>(7)</sup>の仏訳が見られる。さらにボンシェらの説教が数編、当時の代表的な反革命思想家メーストル (MAISTRE, Joseph, conte de) の『作品集』<sup>(8)</sup>として最後に、カロン『身のまわりの人々皆を幸福にする術』<sup>(9)</sup>とかレキューイ『信者である母親のための手引き』<sup>(10)</sup>といった家庭道徳、宗教教育の手引き書がある。

(2) 黙想 (一二点)

ボンシェ『福音書についての黙想』<sup>(10)</sup>など。

(3) 修徳 (八〇点)

まず一八世紀ナボリの神学者で「救世主会」(Redemptorists)の創始者であるリグオリ (Liguori, Alphonso Maria de)の著作多数があげられる。著名な人物としては、その他、フランソワ・ド・サールやアラコクらの名が見られるが、内容としては、聖体、聖心、マリアへの信仰をテーマとした本が大多数を占めている。その他、日課書や祭日の修業の手引きがあり、また、生活の不幸に備える心構えや慰めを説くロワサール『キリスト教徒の慰め』<sup>(11)</sup>といったたぐいの本も教冊見出される。

(4) 静修 (六点)

イグナチウス『心霊修業』など。

(5) 祈禱書 (二一点)

初聖体拝領のための手引きや祈禱書、マリアの月、聖心の月のための祈禱書など。

(6) 伝記 (七九点)

古今、聖俗、有名無名の人々の伝記。伝記と歴史については、後に述べる。

(7) 歴史(四九点)

ボシュエの『世界史論』、一八・一九世紀を通じて広く読まれたロラン(Rollin, Charles)の『古代史』一三巻とその簡約版、ルフラン(Lefranc, Emile)の八巻からなる『歴史講義』(古代、ローマ、中世、近代の各編と年表)の他、古代から現代までの教会史、各国史、フランス史。

(8) 書簡(一二点)

ザビエルの書簡集、海外宣教師の布教の成果や見聞を伝える『教化書簡集』などの他に『レオニーの手紙』とか『バラ色の紙ばさみ』あるいは『軽はずみの危険』といった表題のものがある。最後のものなどは書簡体小説かとも思われるのだが、何れも確かめることができなかった。

(9) 雑(二二点)

ここには、文字通り、雑多な本が詰め込まれている。まず、むしろ歴史に分類されるはずのもの一二点(この中には、たとえば、反革命の立場からフランス革命をフリー・メーソンの陰謀とする説を最初にたてた、有名なバリュエール『ジャコビニズムの歴史についての覚書』<sup>(12)</sup>が含まれている)があり、また伝記も三五点ある。さらに、シャトープリアンの『パリからエルサレムへの旅』をはじめとする一九点の地理・紀行巡礼記、そして説話集六点の他、全体の半分近くを約一〇〇点の子供向きの小説が占めている。この小説の中には、フェヌロンの『テレマク』やデ・フォアの『ロビンソン・クルーソー』(ただし、何れも書き直された版)のような「古典」や、マルモンテルの『インカ』<sup>(14)</sup>、メーストルの『コーカサスの捕虜』、『シベリアの娘』<sup>(15)</sup>のような名作も含まれているが、大多数は無名の著者による『炉端のすてきなママ』、『エリースとデリスカー——ダンスの危険』、『一人の孤児』、『ルネ、むくいられた慈善』などといった教訓を涙とバラの

花の衣でくるんだ感じの読み物である。また小説の形で子供に地理や自然科学を教えるいわば「教養書」も幾編か見られる。その他、シャトーブリアンの『キリスト教精髓』、パニヤンの『天路歷程』があげられているのが興味をひく。

(10) 文学・詩(一七点)

ボッシュエの追悼演説集と選文集、フェスロンの選文集の他、多少とも名の知られた文学者の作品としては、ラシーヌの子、ルイ・ラシーヌの詩『宗教』<sup>(16)</sup>が見られるのみ。その他、さまざまの詩編、詞華集。また、当時大好評を博し、今世紀に至るまで版を重ねたフィロン『予備練習付 新編フランス語課題作文』<sup>(17)</sup>のような教科書がある。

(11) 学習書

アカデミーの辞典の他、辞典数点。文法や作文の教科書。ラ・アルプの有名な『リセ・古今文学講義』全一六卷<sup>(18)</sup>。その他、論理学、修辞学、算術、天文学、博物学、地理学、さらには図画などの教科書や参考書。なお、この中に AMSSOG の略号を冠した教科書のコレクションがある。この略号は、この『カタログ』のタイトルにも付されているが、イエズス会の略号 AMDG にならった聖心会の略号である。コレクションは各学年毎に一編、計四編、各巻三〇〇ページ前後の全一〇巻からなり、一八三七年から毎年一編の割合で刊行され、一八四四年乃至一八六二年まで版を重ねている。<sup>(19)</sup>

(11)

最古版と最近版の出版年——文化の伝統と余命

さきに述べたように、国立図書館のカタログと照合することによって、これらの本の最古版の出版年を知ることが

(カッコ内は%)

表 3. 最古版の出版年別点数

	1710年以前	1711年— 1790年	1790年以後	計
教義・道徳	4 (10)	11 (28)	25 (63)	40
修 徳	15 (25)	20 (34)	24 (41)	59
宗教書全体	25 (21)	35 (29)	59 (50)	119
伝 記	9 (15)	19 (31)	33 (54)	61
歴 史	3 (6)	11 (23)	33 (70)	47
雑	1 (1)	8 (5)	150 (94)	159
文 学・詩 及 び 学 習 書	1 (2)	14 (23)	46 (75)	61
総 計	39 (9)	87 (20)	321 (72)	447

できた。念のためくりかえせば、これはあくまでもカタログに記されているもっとも古い版の出版年で、必ずしも初版の出版年ではない。したがって、相当の誤差を覚悟した上で、<sup>(20)</sup>照合できたすべての本について、その最古版の出版年を調べ上げてみた。結果は、一七世紀以前にさかのぼるものは三〇余点、一割に満たず、一八世紀に出版されたものが約九〇点、二割ほど、残る三二〇数点、七割余が一九世紀になってからの出版物であることがわかった。大部分が同時代の出版物であるという、一見すればあたりまえの結果であるが、しかし、これを分野別に分けて検討すると、様子は大分違ってくる。

つまり、上の表からわかるように、<sup>(21)</sup>革命後の出版物が占める割合は、分野によって相当に違っているのである。全体では七割が革命後の著作という見かけにもかかわらず、宗教書では、半数がアンシャン・レジームにさかのぼる。とくに『修徳』の項では、革命前の著作が六割までを占めている。(『教義・道徳』の項では、この割合は四割にすぎない。この二割の差は、有意味な差であるうか)そして、さらに宗教書全体の二割、『修徳』の項では、その四分の一が、古典主義と「フランス派靈性」(Ecole française de la spiritualité)の時代である一七世紀にさかのぼる。しかし、反面では、一七世紀よりさらに以前にさかのぼる著作はまれであって、リスト全体にわたっても、一六世紀の著作として、さしあたり、前述のイグナチウス『心靈修業』とザビエルの書簡、そしてイタリアの神学者スクポーリの『靈の闘い』、スベ

インのドミニコ会士ルイスの『罪人の手引』<sup>(2)</sup>の四点が見当るにすぎず、さらに古く、中世や教父時代の著作は、当然のことかも知れないが、全く見られない。

宗教書以外についても『伝記』は、革命前の著作が半分近くを占め、『歴史』の場合も、この時代にとつての現代史である革命・帝制期以後を扱ったものを除いて考えれば、この割合はやはりほぼ二分の一に達するのである。『雑』の部で新しい出版物が圧倒的多数を占めるのは、新刊の小説や読みものたぐいが多いからであり、『文学』『学習書』の中には、一八世紀の辞書や教科書が、かなり見出される。

とりわけ宗教書とともに、『伝記』にアンシャン・レジームの著作が多いことは興味深い。これらの伝記は、生徒たちにキリスト教的徳の生きたイメージを与え、修徳の目標や模範を示す教化のための伝記であり、そこには、聖心会の教育のもっとも中核的な理念が表現されていると考えられるからである。そうしてみると、聖心会の学校で子供たちの受けとる文化(教養)が、その中核において、いかに深くアンシャン・レジームに根ざすものであったかがわかるように思われる。

ところが、反対にこれらの本の最近版の出版年を調べてみると、この過去に根ざした文化が、未来に向つては、もはや余り長い寿命をもたなかったことがわかる。

全体としては、リストが作られてから二〇年たらずの内に六割近くの本が消えさり、四〇年後にはその率は八割を越え、二〇世紀まで生きながらえるものは七％にすぎない。そして、詳しく見ると、この場合にも部門によって、かなりの差のあることがわかる。

もっとも短命な著作が多いのは歴史書で、八割までが二〇年以内に寿命を終え、一八八一年以後、つまり第三共和

表 4. 最近版の出版年別点数

(カッコ内は%, 同じくイタリックはその累計)

	1840年以前	1841—1860	1861—1880	1881—1900	1901年以後	計
教義, 道徳	12 (30)	16(40,70)	6(15,85)	2( 5,90)	4(10,100)	40
修 徳	12 (20)	11(19,39)	23(39,78)	7(12,90)	6(10,100)	59
宗教書全体	28 (24)	33(28,52)	34(29,81)	12(10,91)	10( 8,100)	117
伝 記	22 (37)	11(18,55)	13(22,77)	9(15,92)	5( 8,100)	60
歴 史	26 (57)	11(24,81)	6(13,94)	1( 2,96)	2( 4,100)	46
雑	41 (26)	45(28,54)	39(24,78)	24(15,93)	11( 7,100)	160
文学 学習 詩書	24 (39)	13(21,60)	13(21,81)	8(13,94)	3( 5,100)	61
総 計	141 (32)	113(25,57)	105(24,81)	54(12,93)	32(7,100)	445

制の確立後まで生を保つのは、わずかにポシュエの『世界史論』他二点にすぎない。古代史などの場合には考証学的批判の発達によって学問的に古くさくなってしまうとも考えられるが、大部分のものは、何よりも時代の政治的、思想的変動に耐ええなかつたのであろう。

これに対して、もっとも高い割合で寿命の長い本が見出されるのは、宗教書、とくに『修徳』の項と『伝記』で、それが、同時にアンシャン・レジームに最古版がさかのぼるもののもっとも多い部門であったことを考えると、まるで古いものほど長持ちがするともいうようである。実際、宗教書と『伝記』で一九〇一年以後も出版されている一六本の本を調べると、わずかに二点を除いてアンシャン・レジーム、それもとくに一七世紀にさかのぼる著作であることがわかる。宗教書の場合、それらの大半が前述のイグナチウスやスクポリ、あるいはフランソワ・ド・サール、ポシュエ、リグオリらの、いわば「古典」であることからすれば、むしろ、これも当然のこととも言えるであろうが、伝記をも、あわせて考えれば、宗教意識、生活の価値規範という文化の根底にあるものとも変りにくい部分が、ここでも、もっとも根強く生きのびたとは考えられないだろうか。

他方では、たしかに『雑』の部分を中心に、一九世紀に生み出され二

○世紀に（あるいは今日まで）読みつがれる著作も何点かは見出される。先にあげた両メーストルやシャトーブリアンの作品、あるいはスイスの作家ウィース (Wys, J.R.) の名作「スイスのロビンソン」<sup>(23)</sup> などがそれである。しかし、それらはリストにあげられている一九世紀の著作全体からすれば、そのわずか二〇分の一にもあたらない。

こうして見ると当時の聖心学院の伝えようとしていた文化は、深く過去に根ざしながら、しかし、すでに終末にさしかかりつつある文化であったように思われる。それは「トレント・カトリシズム」とフランス古典主義の伝統を継承し、反啓蒙思想、反ロマン主義の立場をとる。もともと、もっぱら伝統の保守に終始し、かたくなに新しい時代の文化を拒否しようとしている訳では必ずしもない。古典主義の規範を教条化し、啓蒙思想を批判する立場からとはいえ、ヴォルテール、デイドロ、ルソーらに大幅なページをさいて論じているラ・アルプの「文学講義」が採用され、シャトーブリアンの作品がとりあげられていることなどから、ある程度の許容性、包容力があつたとは言えるだろう。しかし、この文化を更新し時代への適応を試みる企てが、自覚的に系統立って始められていたとは、やはり思えないのである。

なお注に、最近版の出版年が二〇世紀におよぶものの一覧を、参考までにあげておく。<sup>(24)</sup>

付記 以上の分析の結果を、従来の日本におけるフランス近代史の理解の枠組で解釈すれば、聖心会の伝えようとしていた文化は、本質的に、すでにフランス革命により倒されたアンシャン・レジームの貴族階級の文化であり、本来は、とうに過去のものとなっていたのが、かろうじて命脈を保ってきたにすぎないということになるのだろう。だが、この文化は、フランス革命以後も、少くとも一九世紀前半には、旺盛な生命力を示し、むしろ、革命の試練により再生、強化されたようにさえ思われる。たしかにフランス革命から二月革命に至る半世紀余は、政治をはじめ、芸

術や思想の領域でも、対立と波瀾にみちた時代である。だが、この表面の変化にもかかわらず、指導階級の文化をその宗教意識や生活規範といった基底においてとらえると、案外、それはフランス革命によっても深刻な変化は受けず、アンシャン・レジーム以来のありかたを持続しているのではないだろうか。これは、全くの予想にすぎないのだが、むしろ、深い変化は、一九世紀後半に現われるように思われるのである。(未完)

## 注

(1) 聖マグダレナ・ソフィアの伝記やこの時期の会の歴史については、主な参考文献は、シスター三好切子の書かれた新刊のすぐれた伝記『聖マグダレナ・ソフィアの生涯』(東京、一九七八年)や Charry (Jeanne de), Sainte Madeleine Sophie, fondatrice de la Société du Sacré Coeur de Jésus (1779-1865), Paris, 1965 などの伝記にあげられるので、ここでははぐり返し記すまでもないであらう。

(2) 照合できなかった四点の内、Mazas Hist. de la révolution de 1830 というのがあった。周知のようにブルボン復古王制を倒し、アンシャン・レジーム貴族の国家支配を最終的にくつがえした一八三〇年七月革命を扱ったこの本は、あげられている本すべての中で、もっとも最近の事件を扱った本であり、一体、どんな本なのか、大いに興味をひかれた。そこで、かなり懸命になって探しまわったのだが、結局分からずじまいであった。同じ著者の他の二冊『フランス史』と『中世武将伝』は簡単に著者名目録で見つかったのだが、なおさら不思議でもあった。ところが、帰国後、ふとしたことから、それが Saint-Cloud, Paris et Cherbourg, mémoires pour servir à l'histoire de la révolution de 1830 なる書物であることを知った。つまり『カタログ』の編者は、副題のそのまた一部を記していたのに、国立図書館の目録には副題が記されていなかったらしいのである。

(3) その他、『悪書』にあげられている有名な書物を、二、三、参考までに記せば、タッソーの『エルサレム解放』、サン・ピエールの『ポールとヴィルジニー』、『ドン・キホーテ』、『千一夜物語』などがある。因みに『ドン・キホーテ』は、少女時代の聖マグダレナ・ソフィアの愛読書であった。(シスター三好、前掲書、二三頁)



- (4) HUMBERT (abbé P. H.) Pensées sur les plus importantes vérités de la religion et sur les principaux devoirs du christianisme, 1742.
  - (5) GUENEE (abbé A.) Lettres de quelques juifs portugais et allemands à M. de Voltaire, 1769.
  - (6) FRAYSINOUS (comte D. L. de) Défense du christianisme, 1825.
  - (7) COBBETT (W.) Lettres sur l'histoire de la Réforme en Angleterre et en Irlande, 1827.
  - (8) CARRON (abbé G. T. J.) L'Art de rendre heureux tout ce qui nous entoure ou Petit traité sur le caractère, 1817.
  - (9) L'Euvre (Le Père J. B.) Manuel d'une mère chrétienne ou Courtes homéries sur les épîtres et les évangiles des dimanches et fêtes, 1822.
  - (10) BOSSUET (J. B.) Méditations sur l'Evangile, 1730.
  - (11) ROISSARD (Le P. N.) La Consolation du chrétien ou Motif de confiance en Dieu dans les diverses circonstances de la vie, 1775.
  - (12) Lettres édifiantes et curieuses, écrites des missions étrangères, 1781.
  - (13) BARRUEL (abbé A.) Mémoires pour servir à l'histoire du jacobinisme, 1798.
  - (14) MARMONTEL (J. F.) Les Incas, 1777.
  - (15) MAISTRE (Xavier de) Les prisonniers du Caucase, 1825. id., La jeune sibérienne, 1828.
  - (16) RACINE (Louis) La Religion, 1742.
  - (17) FILON (A.) Nouvelles narrations françaises précédées d'exercices préparatoires, 1827.
  - (18) LA HARPE (J. F. de) Lycée, ou Cours de littérature ancienne et moderne, an VII—an XIII (1799-1804).
  - (19) AMSSOG Cours d'études à l'usage de la quatrième classe, Paris 1837, 2 vols in 18, etc.
- このロマンチックな内容の書籍は、トヘリイの日記やマニエールに於いて頻りに言及されてゐる。諸君は、Z46331 他°  
 本書を参考せられた各編の内容をみれば、次の通りである。

第四学級〔初級〕第一卷 聖史 第二卷 教会史概略、フランス語文法の基礎、地学の基礎

第三学級 第一卷 フランス語文法の基礎、地理—古代地理、近代地理（フランス） 第二卷 芸術についての基礎知識、神話第一部、文学要説（詩篇、歴史）、『エステル』、『世界の驚異』

第二学級 第一卷 フランス語文法 第二卷 近代地理（ヨーロッパ） 第三卷 科学の基礎知識（言語学、神学、法学、医学、数学）、神話、文学（詩）、『アタリ』

第一学級〔最上級〕第一卷 フランス語文法 イエス生誕から現代までの歴史年表 第二卷 近代地理（ヨーロッパ） 外）、天文学 第三卷 神話、文学（詩）

(20) 気のついたもので、他の手段によって初版の年数を確めたものもいくつかあるが、完全ではない。

(21) いうまでもなく、一七一〇年は「歴史上の」一七世紀と一八世紀の凡その境界であり、一七九〇年は革命前後を分ける区切りである。一七九〇年以後を区分しなかったのは、これもあたりまえのことであるが、革命期の著作はほとんどなく、また、帝制期以後を細分する必要は余りなさそうに思われたからである。

(22) Scupoli (Le P. Lorenzo) Le Combat spirituel.  
Louis DE GRENADE, La Guide des pécheurs.

(23) ただし、このリストにあげられているものは、翻訳というよりも翻案のようである。

(24) 最近版が一九〇一年以後に出版されている著作の一覧 括弧内は最古版と最近版の出版年（ボンシェ・メーストルらについて省略）

〈教義・道徳〉

Gaure (abbé J. B.) (trad.), La Sainte Bible en latin et en français. (1834, 1909)

MAISTRE (Joseph DE), Oeuvres.

Bossuet (J. B.), Sermons choisis.

Eudes (Le bienheureux J.), Contrat de l'homme avec Dieu par le saint baptême. (1664, 1909)

〈修徳〉

Licouri (Saint A. M. DE), Pratique de l'amour envers Jésus-Christ, tirée des paroles de Saint Paul. (1829, 1919)

*ibid.*, Paraphrase du *Saire Regina*. (1827, 1907)

SCUPOLI (Le Père L.) Le Combat spirituel. (1644, 1938) (éd. orig. 1589)

FRANÇOIS DE SALES (saint), Introduction à la vie dévote.

RODRIGUEZ (Le Père A.), Pratique de la perfection des vertus chrétiennes et religieuses. (1623, 1914) (éd. orig. 1614)

SURIN (Le Père J. J.), Les Fondements de la vie spirituelle tirez du livre de l'*Imitation de Jésus Christ*. (1667,

1930)

〈雑考〉

IGNACE DE LOYOLA (saint), Exercices spirituels.

〈伝記〉

CEPARI (Le Père V.), Vie de saint Louis de Gonzague. (1788, 1938) (éd. orig. 1606)

COLLET (abbé P.), Vie de saint Vincent de Paul. (1748, 1901)

MANSOLLIER (abbé J.), Vie de saint François de Sales. (1700, 1922)

GUYARD DE BERVILLE, Histoire de Bernard Du Guesclin. (1767, 1903)

RATISBONNE (abbé M. J. L. Th.), Histoire de saint Bernard. (1840, 1903)

〈資料〉

LHOMOND (Ch. F.), Histoire abrégée de l'Eglise. (1787, 1902)

BOSSUET (B. J.), Discours sur l'histoire universelle.

〈雑〉

CHATEAUBRIAND (F. R. vicomte DE), Itinéraire de Paris à Jérusalem.

MAISTRE (Xavier DE), La jeune sibérienne.

*ibid.*, Les prisonniers du Caucase.

PROVART (abbé L. B.), L'écolier vertueux, ou Vie édifiante d'un écolier de l'Université de Paris. (1772, 1925)

CUATEAUBRIAND (F. R. vicomte de), Le génie du christianisme.

WYSS (J. R.) Le Robinson suisse.

(anonyme) Les naufrages au Spitzberg, ou les Salutaires effets de la confiance en Dieu. (1839, 1912)

GAUWIE (Mgr. J. J.), Le grand jour approche! ou Lettres sur la première communion par un ancien missionnaire d'Amérique. (1836, 1911)

VEULLOR (L. F. V.), Les pèlerinages de Suisse. (1839, 1923)

*ibid.*, Rome et Lorette. (1841, 1923)

〈文藝・誌〉

BOSSUET (B. J.), Oraisons funèbres.

FILON (A.), Nouvelles narrations françaises précédées d'exercices préparatoires. (1827, 1920)

〈詳細誌〉

NOEL (F. J. M.) et CHAPSAL (Ch. P.), Nouvelle grammaire française. (1823, 1902)